

とうほく街道会議第13回交流会 大館大会

第2分科会 記録集



平成29年 10月 13日

とうほく街道会議第13回交流会
大館大会実行委員会

「とうほく街道会議第13回交流会 大館大会」 ～ “歴まち” 大館の明日を考える ～

【第2分科会】 パネルディスカッション

『ガイドからはじまるまちづくり～歴まちガイドを目指して～』

各地の街道や町並で活躍するガイドたち。彼らが誇りを持って“わが街”を案内することは、やがてまちづくりにつながる大きな一歩になっています。歴史まち・大館を担うガイドの意義、役割について、他地域の事例をもとに語り合いました。

【日 時】 平成29年10月13日(金) 16:00～17:30

【会 場】 「大館中央公民館」視聴覚ホール (大館市字桜町南45-1)

【出演者プロフィール】

◎コーディネーター

田中 孝治 氏 NPO法人全国街道交流会議 理事



北海道生まれ、静岡県在住。平成2年(社)静岡政経研究会・地域産業研究所常務理事所長を経て、平成23年(株)日本平ホテル監査役。ふじのくにしずおか観光振興アドバイザー。平成13年NPO法人エヌ・ピー・オー伊豆専務理事。NPO法人地域づくりサポートネット副代表理事、代表理事を経て副会長。平成23年NPO法人日本風景街道コミュニティ理事を務める。

○パネリスト

中村 弘美 氏 矢立自然友の会 会長



大館市生まれ、大館市在住。大館市議会議員。矢立自然友の会会長、羽州街道交流会幹事、羽州街道矢立峠散策会主宰。主に羽州街道秋田・津軽藩境矢立峠の自然と歴史をテーマにして活動を行い、峠の整備や保全に努めながら、毎年探訪ツアーを開催している。また、矢立峠を通った伊能忠敬、吉田松陰、明治天皇、イザベラ・バードなどの記録を表す説明板や標柱の設置を進めている。

澤木 博之 氏 男鹿半島・大湍ジオパークガイドの会 会長



男鹿市生まれ、男鹿市在住。秋田地学教育学会員、日本自然保護協会指導員。自然フィールドでの活動を主に行い、平成27年からジオパーク・ガイドとして活動。フェイスブックで男鹿半島・大湍ジオパークの素晴らしさを発信している。自然観察会活動などを含め、毎日のようにフィールドに出かけている。アマチュア無線、ジョギング、釣り、登山・トレッキングを趣味としている。

平井 太郎 氏 NPO法人小田原まちづくり応援団 副理事長



小田原市生まれ、弘前市在住。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。平成24年弘前大学人文社会学部・同大学院地域社会研究科准教授、現在に至る。

専門：社会学(地域における合意形成)。小田原まちづくり応援団は、東海道小田原城下に江戸時代から残る老舗の活性化のために“生業(なりわい)のまちづくり”として、まち歩きガイドの活動などを行っている。

『ガイドからはじまるまちづくり ～歴まちガイドを目指して～』

田中孝治氏(以下:田中): こんにちは。田中と申します。昨日、静岡からきました。平成16年に山形県上山市で全国街道交流会議の全国大会を開催しました。その時、羽州街道はじめ、東北の街道のことについて、少し勉強させていただいたこともございます。

さて、本日のテーマは「ガイドからはじまるまちづくり」で、大館市の歴史ガイドの新しい仕組みづくりにあるということです。

本日お招きしたパネラーの3人は、それぞれの地域で、ガイドを実践しておられます。私も、東海道関係のガイドの方々と一緒にすることが多いのですが、それぞれに課題を抱えていることが分かります。

今日は、皆さんが活動をしている中で出てきた課題や悩みも含めながら、どうしたら大館の歴史ガイドがうまく発展、定着していくのか、ということで話を進めさせていただきたいと思います。

はじめに、まち歩き・街道歩きを中心に、どのような活動をしているかを紹介させていただきたいと思います。次に、まち歩き・街道歩きガイドの役割と、抱えている課題、それに対する解決策を話し合うことで、大館のガイドの発展と定着のヒントが発見できればいいのかなと思います。

活動の紹介

田中: 矢立自然友の会の中村さんにお伺いします。矢立峠は、菅江真澄、吉田松陰、伊能忠敬、イザベラ・バードなど、いろいろな人物が通った、歴史的に有名な街道です。また、峠が藩と藩を分ける境になっており、歴史的な資源でもあり、自然の資源という点からも重要な舞台です。

中村弘美氏(以下:中村) 私は、羽州街道の中の矢立峠歩きをしていますので、そのことをお話しします。

矢立自然友の会は、平成2年4月に、矢立公民館のサークルとして発足しました。私は、以前に十和田八幡平国立公園のガイドのようなことをやっていたので、当時の公民館長さんから、60歳定年、あるいは55歳くらいで第一線を退いた方々が最後まで山登りができるような、自然に親しみながら自然を学ぶことができるような、そんな会をつくってもらえないか、という話があったことがきっかけです。

会の発足当時から、現在の道の駅「矢立峠」を出発して、秋田杉の中を巡りながら日景温泉へ行く道、矢立遊歩道といいますが、の探訪を毎年行っていました。平

成5、6年頃からは、地元の小中学生も案内していました。そのころ、矢立峠の歴史の道の整備や手入れを一所懸命されている方がおりました。その方は、大館市の北羽歴史研究会の前会長である鷲谷豊さんで、「もっと地元の峠のことをしっかり勉強しながら手を入れてくれないか」ということを現場で言われました。それから、単に散策路に子供達や会員を連れて歩くだけではなく、歴史の道として私たちができる整備をやってきました。

散策会を開くと地元の新聞に取り上げられることが多くなりました。平成14年8月には、吉田松陰のゆかりの地を巡る山口県萩市の市制70周年記念ウォークというイベントがあり、萩市の中学生や市民、それに弘前市の方々合わせて100人を案内しました。

私たちの散策会は、現在は市町村合併により青森県平川市となっていますが、当時の碓ヶ関村まで歩いています。整備を進めていく中で、青森県側の散策路の排水作業も行うようになりました。春先に、鍬やスコップを使って、なんとか歩くことができるようになりますのですが、それでも長靴でなければならず、困っていました。そこで、青森県側で一所懸命活動されている人たちと一緒に、営林署や自治体に声掛けをしました。少し時間はかかりましたが、湿地帯に木道がつくなど、特に、明治天皇がお通りになった明治新道(旧羽州街道)の青森県側からの整備が進みました。自分たちが地元を歩いて楽しむことから、隣県の方たちとの交流が深まり、自治体の協力を得る、という非常に良い形で進んだと思っています。



実際のルートですが、道の駅「やたて峠」側からの遊歩道両側には、樹齢300年以上の天然秋田杉が約20ヘクタールぐらい広がっています。これを見上げながら歩いていくと、15分ほどで津軽藩主が参勤交代に使った「古羽州街道」に至ります。古羽州街道を、さらに進んで、左に曲がれば日景温泉に続く矢立遊歩道です。右に行くと国境(くにざかい)に向かうのですが、ここから先に、歴史を物語る二つの道があります。分かれた道は200メートルほど進むとまた合流するのですが、稜線を挟んで片方を秋田藩、もう片方は津軽藩が通った道といわれています。青森県側に下りていくと、吉田松陰が東北を旅した時に残した「東北遊日記」の説明板があります。この説明板は旧碓ヶ関村が設置したもので、相馬大作事件のことにも触れるなど詳しく内容が記されています。さらに下りると、一番古い羽州街道が170メートルぐらい残っています。その先に、青森県側峠道の入口に説明板があります。そこから折り返して、今度は明治新道を通ります。途中、イザベラ・バードの石碑の前で説明をし、青森県から再び秋田県に入り、明治天皇が秋田県に第一歩を記した行幸碑跡を通過して、明治新道の起点である矢立温泉の上にある広場に出ます。ここから砂利道の旧国道7号を通過して道の駅に戻るのですが、この旧国道は昭和30年代の終わり頃まで使われていました。また、道路の右側には、明治時代の鉄橋の橋脚や線路跡がそのまま残っています。ここは、峠の勾配がきつく、蒸気機関車を3台連ねて列車が通ったところで、交通の博物館ともいえると思います。距離にして約4.3キロメートルを約2時間半かけて、春は新緑、秋は紅葉を眺めながら巡ります。小学生から高齢の方まで、年間、10から15組を案内しています。

最近では街の中でも熊が出るので、「熊はどうですか?」と聞かれます。6月と9月には広く刈り払いをしていますし、私はこれまで年間20回くらい歩いていますが1度も熊に遭遇したことはありません。矢立峠は、安心して歩ける峠道であることをお知らせしておきます。

田中: ガイドは主に2人というお話でしたが?

中村: 当初は4,5人でやっていましたが、メンバーも年齢を重ねてきましたので、ガイドは今2人ですが、他のメンバーにはグループの真ん中や後ろで見守りをしてもらっています。

田中: ありがとうございます。吉田松陰の話が出ましたが、全国街道交流会議の最初の大会は萩市でした。その時に、松陰が歩いた東北の道を検証されている方がパネラーとして参加され、資料をいただきました。

そこには下田街道が入っていなかったのか、「どうして下田街道が入っていないのか」と質問したところ、「松陰は下田街道を歩いていない。籠に乗せられていたから歩いていない」と言われたことが記憶に残っています。松陰については、萩よりも東北の方がいろいろな研究をしているということを感じました。

続いて、男鹿半島・大潟ジオパークガイドの会の澤木さんにお伺いします。伊豆は昨年、世界ジオパークの申請をしましたが、宿題付きで採択されず、今年再チャレンジをしています。そのことが逆に地域の人たちがジオパークとは何なのか、伊豆の地域資源は何なのか、ということを考え直す良い機会になったと思います。

澤木さんには、男鹿半島・大潟ジオパークの価値と、どういう形でガイドをされているのかということを中心にお話を伺いたいと思います。

澤木博之氏(以下:澤木) 私は、男鹿半島・大潟ジオパークの簡単な紹介、ガイドの会の紹介、ジオパークの公式ガイド認定の仕組み、それと会が抱えている悩みと課題についてお話ししたいと思います。

私は昭和24年、男鹿半島に生まれ育ちました。男鹿と言えば「なまはげ」行事がありまして、大みそかは大変な恐怖でした。私たちの生まれた時代は戦後ベビーブームで子どもが大変多かったです。仕事から転勤もありましたが、サラリーマンを退職して、ジオパークガイドをやっています。



ジオパークについては、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、ジオは地球とか大地、パークは公園、という意味です。直訳すると「自然豊かな大地の公園」ということですが、中身が非常に濃い。男鹿半島・大潟村ジオパークは、大潟村も含めて縦横30キロメートル四方のエリアです。その中に、火山、地層や地質、岩石、火山地形の奇岩など、スケールの大きい大地の歴史がい

っぱいあります。それに山野草といった植生、地域の歴史や文化、風習もいろいろあります。

当初は、植生を含めて主に地質とか火山とか、足の下の方、山、火山が何でここにあるのか、川はなぜここを流れているのか、海岸はなぜこのような形なのか、という地形的なことも含めて案内をしていました。ここ数年は、男鹿の歴史や食を含めた文化、伝説などの要素が加わってきて、もともと性能の悪いコンピュータなものですから、四苦八苦しなからやっています。

ガイドの会の会員は、男性18人、女性が16人、合わせて34人です。20歳代から80歳代まで幅広いのですが、ほとんどが60から70歳代ですので、これからは、若い人に継いでいってもらわないと、先が思いやられるという時期に来ています。

ジオパーク公式ガイドになるためには、2年間、ガイド養成講座を受講します。最初の年は初級講座、2年目には上級講座で環境から歴史、伝統文化などいろいろなことを学びます。最後は認定試験を受けて合格するとジオパークガイドとして公式に認定されます。この春で3回目が終了しています。

先ほど触れましたが、ガイドの会の課題は、なかなか若い世代が入ってこないことです。60代、70代が多くて、辞める時にはごっそり辞めていくことが予想されるので、世代が繋がっていかなくなるように思います。

それとガイドのスキルアップです。男鹿半島の地質や火山については、さまざまな研究者や先生が論文を書いたり研究したりしています。その最新情報を学ばないと、古い情報をお客様にお伝えすることになります。このため、月に1回は、それぞれの分野の先生をお呼びして研修会を行っています。会員の年代が幅広いので、なかなか全員が理解するのは難しいところもあります。この様な課題はありますが、ガイドの会の活動等は行政側の協力もあり順調に推移しています。

田中さんからお話がありましたが、ガイドは、地域のいろいろなグループや団体の方々とネットワークを組んで、住んでいる地域の方々に地域のことを知ってもらうということが一番の基本だと思います。日本ジオパーク委員会でも、「地域住民の知らないジオパークはあり得ない」と、はっきり言っています。住民に浸透させるのは、一気にではなく、少しずつネットワークを広げていかないとうまくいかないのではないかと感じています。

田中: ありがとうございます。男鹿半島・大潟の外にも、非常に多くの地域が日本ジオパーク、世界ジオパークに認定されています。この外に世界遺産、最近では文化庁の日本遺産など、地域や歴史を見直すいろいろな制度が出来てきていますが、その価値をどうやって伝えていくのか、ガイドの役割は非常に重要です。富士山を例にとると、富士山は日本一高い山というだけではなく、その歴史や風土、人々の関わりといったところまで対象にしなくてはなりませんから、ガイドをするには非常に幅広く勉強しなくてはなりません。その意味では、ガイドの力量、質が問われています。いろいろな制度が出来てきているのは、どうやってお客さんや地域の方たちにその価値を伝えることができるのか、というのが大きなテーマだからなのだろうと思っています。ガイドの問題や課題については、また後でお話しさせていただきます。

続いて、NPO法人小田原まちづくり応援団の平井先生にお伺いします。まちづくり応援団は有名で、私たちにも活動の様子が伝わってきます。

「まちづくり応援団」とは何かということ、私なりに解釈してみると、みんなが「小田原は人の往来と交流で栄えてきたまちである」ということを共通意識として持つということ。その中に「まちえんをつなぐ」という言葉が出てくるのですが、ひとつは、地域と人の「縁」、いろいろな主体の人達の「縁」をつなぐこと。

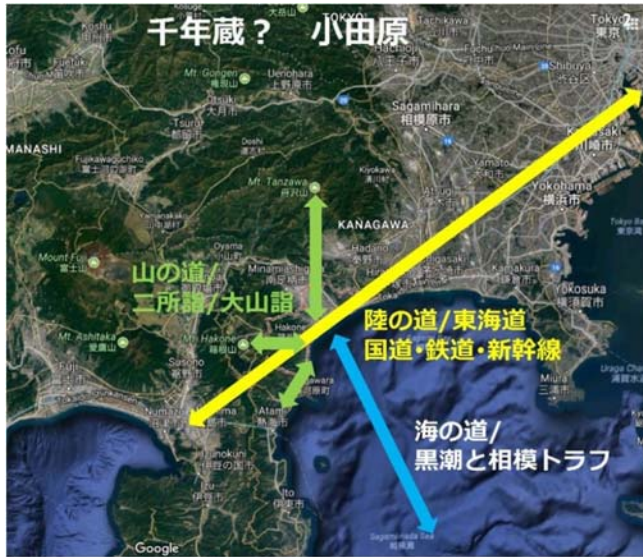
もう一つは、地域の宝物を探して活かすことやまちづくりに取り組んでいくことを応援することだと思っていますが、いかがでしょうか。応援団の主な活動は、「小田原宿千年蔵構想を実現すること」と書いていた資料があったのですが、この千年蔵が何を意味しているのかも教えていただきたいと思います。

平井太郎氏(以下:平井) 小田原まちづくり応援団の平井と申します。6年前から弘前大学で教鞭をとっていて、今日も講義を終えて、会場に参りました。確か、去年の1月、NHKの番組「プラタモリ」で小田原が取り上げられました。そのディレクターが知り合いで、ガイドを依頼されてお話をしたことがあります。

平成12年、当時は地方分権が言われていた頃ですが、小田原市に市民、研究者、市職員が一緒になってものを考えていく場「小田原市政策総合研究所」ができました。そこで、小田原市の千年蔵構想をつくりました。その時の研究所のメンバーが平成15年にNPO法人小田原まちづくり応援団を立ち上げました。「まちえん」は小田原まちづくり応援団の略称で、「えん」は、「応援」、「縁」を繋ぐ、えにしの「縁」を掛けたものです。

まち歩きは、研究所設立時から今も、応援団の活動の原点として大事にしています。

平成22年からは、市が買い取った旧黒田侯爵の別荘を我々が引き受けて、そこを拠点にして小田原のまち案内をやっていきます。今では、お客様が年間約4万人、ガイド収入は100万円か150万円くらい。施設では飲食も提供していて売り上げが約1千万円と、かなり大きな



組織になりつつあります。

小田原市は、富士山を背景に箱根山と丹沢山に囲まれた小さなエリアです。海と山が接近しているところで、古くから交通の要所として知られていました。東海道が国道1号となり、東海道本線、そして東海道新幹線が通っていて、小さな町ですが、時間軸がちゃんとあります。相模トラフを通じて黒潮海流も入ってきて海にも開けていた歴史があります。山の道もあります。箱根権現と熱海の伊豆山権現へ向かう二所詣という信仰の道が鎌倉時代からありましたし、江戸時代に盛んだった丹沢の大山に登る大山詣もあるといった、山の道の起点となっていたところです。

小田原の人たちは、地域資源があり過ぎる、という贅沢な悩みを抱えています。しかも東京から一番近い天守閣のある桜の名所「小田原城」には年間500万人が訪れ、日本最大の観光地・箱根が控えています。物産も、小田原蒲鉾をはじめ、高級品として人気の高い梅干し、高級車の内装やスピーカーの外装にも使われている箱根寄せ木細工などがあります。どこの地域でも、地域資源を生かす時に「どれだけ高く売るか」ということが課題になると思いますが、小田原ではこれ以上何をすれば良いのという状態でした。

しかし、町の中を歩いてみると発見がありました。一番驚いたのは、地元で活動している人たちも知らない鰹節屋でした。その建物は海岸から通りまでつながっています。かつては、水揚げしたカツオやサバを、捌く、

煮る、カビ付け、一連の工程が建物の内部で行われていました。建物の中を通ってくると鰹節になってしまふという優れた工場で、道に面したところで販売をする。この鰹節は箱根や熱海の高級旅館・料亭で扱われており、ここのおばあさんも最初は、「一見さんお断り」と言っていたのですが、今では、笑顔でお客さんを迎えて、気さくに試食もさせてくれるようになりました。

海から恵みを引っ張り上げて、それを加工して道行く人たちに楽しんでもらう、地域の自然とそこに育まれてきた生活とを繋ぐ、なりわいの文化が小田原のコンセプトじゃないかということに気付いて、これが、小田原という街の一つの柱、千年にわたって自然と共に生きてきたなりわいの文化、千年蔵構想につながりました。今では、こういう古いお店を、巡るツアーを年間20・30回とやっています。

小田原城は、箱根山からの舌状台地端の崖の上であり、本丸、二ノ丸は明治時代から大正時代には御用邸として使われていました。また、お城の周辺には山縣有朋や伊藤博文など有力な政治家や財界人の広大な別荘が建てられました。その後、これらの建物は企業の保養施設などになり、バブル崩壊とともに小さな分譲地に切り売りされていました。これを何とかしなければいけない、と小田原市が歴史的風位維持向上計画に基づいて小田原城の史跡整備をする目的で、少しずつ別荘の買い取りを進めていました。



平成22年、黒田侯爵邸の建物を、会のメンバーなどが整備してカフェに改装し、ここを拠点としてまち歩きを行っています。元の持ち主であった侯爵が出版した日記代わりの漢詩集を解説し、彼が行っていた歳時のお茶会やひな祭りなどを再現しました。ひな祭りは、ここだけではなく、先ほどの鰹節屋などのいろいろなお店でも飾り、雑めぐりを実施しています。

また、小田原は、北原白秋が15年ほど滞在したところでもあります。そこで、白秋が歩いたであろうカタチの道を案内して、花が咲いていたりや実がついて

いる中を、お客さん会話しながら歩いたりもしています。

教科書に出てくるような歴史ではなく、自分たちが生きている小田原のいろいろなことについて、資料を集め、勉強し、分かりやすい物語にして、皆さんに歩いて体感して頂き、ゆっくり過ごしてもらうことも行っています。

田中: 小田原市、箱根町、静岡県三島市は協議会を作って県境を越えた活動をしています。今年は箱根宿が開宿されて400年目になりますが、その時に三島と小田原の人々を移住させているので、今でも箱根には三島町と小田原町という2つの町名が残っています。東海道は、県境を越えた往来の中で成り立っているということです。ですから、澤木さんのお話にもあったとおり、ネットワークが必要で、自分の町のことだけ語っては自分の町の本当の姿が分からないと思います。

基調講演の渡辺先生の話でも出ましたが、大館も、絶海の孤島のように大館だけで何かをやってきたのではなく、頻繁な往来の中でまちが成り立ってきたということを考えると、これからガイドをやっていく時に、往来の中でまちが発展してきたという広域の視点が非常に有効だと思います。

もう一点、六次産業についてです。一般に、一次産業の六次産業化という捉え方をされていますが、観光が食材を加工して土産を売れば観光の六次産業化もあるのではないかと思います。農業は一次産業で加工すれば二次産業、それを売れば三次産業というような、壁を作って議論する時代ではないと思います。

ガイドにも、できるだけそういった壁を取り払った視点も必要だと思います。

長崎市に「さるく」（“ぶらぶら歩く”という意味の方言）があります。まち歩きや街道歩きを楽しんでいる人は昔からいましたが、これに、ガイドやまち歩きという仕組みを整え、観光形態にした最初のイベントが「長崎さるく博」ではないかと思っています。

ガイドに必要な「心・技・体」

田中: ガイドの仕組みを作っていく時に、まちに対する関心や思いは非常に重要です。この関心や思いがなければ始まらないのですが、一方で、「思い」に重点を置き過ぎて、思いと熱意さえあればすべて解決すると思込み過ぎてきたのではないかと。「心・技・体」と言いますが、まち歩きも同じで、「心」＝地域に対する熱い思いと関心があり、「技」＝それを掘り起こしたり・伝えたりする知恵と技術が必要で、「体」＝それを発展させるための仕組みや組織があって成立するものだと

思います。まちづくりの会合があると夜なべ談義があります。そこでの会話は、愚痴や泣き言で終わりというのが多いような気がします。そこを乗り越えていくためには、心・技・体をそろえていくことを考えていく必要があります。

大館の歴史まちづくりを考えていくにあたり、心・技・体を中心にしながら議論いただきたいと思います。ガイドはいろいろあって、ボランティアガイドという言い方があります。ジオガイドは、技術的、制度的には、他のボランティアガイドに比べてかなり整っている印象がありますが、澤木さん、いかがですか。

澤木: ガイドの会はジオパークの指定を受けてから立ち上がりましたが、行政がガイド養成、料金体系などを一所懸命に整えました。普通、お客様の窓口は観光課や観光商工課、あるいは観光協会ですが、男鹿半島・大湊ジオパークの窓口は男鹿市、大湊村ともに教育委員会です。生涯学習課のジオパーク推進班が推進協議会事務局で、観光行政とは一線を画しています。

ガイドの依頼は、窓口の事務局からガイドの会にきます。それを会員に一齐に流します。手を挙げた会員の中から、案内回数のバランスなどを考えながら振り分けていきます。今のところ順調に動いています。

田中さんから心・技・体のお話がありましたが、未だ全て整っていません。活動をしているいろいろな問題が出て来て、それを解決するのに四苦八苦しています。しかし、問題が出てくるのは活動している証拠と捉えて、行政とベクトルを合わせて、協力しながら一つひとつ問題を解決しています。

田中: ガイド料金はいくらですか。

澤木: 時間単位ですが、最低2,000円から最高8,000円までで、だいたい全国横並びです。お客様20名までガイド1名が対応、お客様が20名を超えるとガイド2名の対応になります。

田中: ネイチャーガイドやナチュラルリストガイド、ジオガイドの場合は、お客さんが料金を払うことに対して理解がある。しかし歴史など文科系のガイドは、ガイド側、説明する側に重点があって、お客さんにはお金を払うという意識がないということを聞きます。料金を払う側からの理解は得られていますか。

澤木: 事務局に依頼が来た時点で料金を説明し、高いときは、行程や時間を減らすといった調整を事務局側がするので、私たちは、そこまで考えたことはありません。

田中: どんな団体でもアンケートを取ると、活動資金が足りないという回答が出てきます。中村さんの資料

に民間の応援制度「大館愛購運動」というのがありました。これはどのようなものですか。

中村: 大館青年会議所が事務局で、この運動に協力してくれる商店やガソリンスタンドなどが加盟します。消費者は、その加盟店で買い物をする、ポイントがもらえます。そのポイントを、受益団体として登録している、学校PTA、野球部後援会、スポーツ少年団や矢立自然友の会などの団体を消費者が指名して寄付するという仕組みです。地元で買い物をして、地元の活動に還元する。寄付額は、その団体によって様々です。私たちは、刈り払いの燃料代などに充てています。

田中: なるほど。地域に愛着を持つことで、活動資金を互いに生み出していくというのは、先ほどお話しした心・技・体の技、知恵の一つだと思います。こういうやりかたもあるんですね。

中村: 私たちの会の会員は、当初30人で始まって、現在37人です。年会費の1,000円が原資です。事務局は公民館で、依頼があった際、料金のお話が出れば、「ガイド1人5,000円、3人だと15,000円です」ということをお伝えします。

ガイドの役割

田中: ガイドとは何か。平井さんにお伺いします。

平井: 多くのお客さんに小田原で、良い思い出をつくってもらい、お金を使ってもらうためには、さまざまな小田原の物語を聞いていただきながら、長い時間を過ごしていただくことが必要です。そのためには、ガイドの力が大事です。

例えば、矢立峠の自然の道を単に歩いてしまったり、ジオパークの岩を岩として眺めてしまったりするのはなく、一つひとつに様々な知識を持つこと。

歴史まちづくりについて言うと、大きなポイントは、文化財とそこに暮らす人々の営みです。営みとは、大館で暮らしてきた皆さんが歩んできた生活の歴史、生活で学んできた情報や知識であり、文化財と生活者の情報をかみ合わせていかないといけません。

歴史ボランティアガイド養成の仕組みは以前からありますが、3年間といった長い時間をかけてガイドになります。そうすると、ガイドは自分が勉強した知識を話したがりです。お客様は勉強に来ているわけではないので、頭に入りません。この天守閣のここの角から見たあの景色は何なのか、この花は、あの木は何なのかということをお話してくれるガイドをほめてくれます。ですから、普段の生活の中でアンテナを張って、いろいろな人と話をすることが大事です。

私たちも、勉強はしますが、花が得意、食に詳しいなど、それぞれの持ち味を生かして話ができるガイドがポイントだと思います。

田中: 平井さんがお話ししたように、相手を無視して一気に知識を吐き出すタイプのガイドが結構いて、そこから出てくる課題も非常に多いのではないかと思います。

観光ボランティアガイドが抱えている問題で指摘されているのは、ガイドの質と力量と、ボランティアだから、してやっているという意識があります。それと観光ツアーの下請けになっているのではないかと指摘もあります。

そもそも、ガイドが無償ということに原因があるのではないかと思います。中村さんも澤木さんも無料ではありません。平井さんのところはいかがですか。

平井: 有料です。コースによって料金体系があります。

田中: 価格表があるということですね。中村さんは、聞かれたら料金を言う。

中村: そうです。私から料金は言いません。普通の方々は料金を聞いてきます。その時は、半日であれば5,000円、20人以上になると、1人では大変なので2人で1万円とお答えします。

田中: この問題は、お金のことは言わない方が格好いいという日本的なところがあるのですが、ガイド団体をやるのであれば、活動資金が必要ですから、他の方法で資金を得ることができるのであれば併用しながら、仕組みとしてガイド料金、適正な報酬はもらうべきだという指摘もあります。適正な報酬というのはなかなか難しいのですが、大館の歴史ガイドのこれらについてアドバイスがありましたらお願いします。

澤木: ガイド料は高いに越したことはないのですが、バランスが難しい。プライドを持ってガイドをできる仕組みが必要だと思います。

また、平井さんの言う様に、場数を踏むことが大切です。お客様は十人十色、千差万別なので、説明は10分位が限度で、ガイドとして伝えたい要点をまとめ、できるだけ簡潔に話すことが大切です。歴史や生活の裏話は面白がって良く聞いてくれますね。

田中: 平井さんはいかがですか。

平井: 歴史まちづくりでは、歴史的建造物など、後世に残すべき歴史的風致を選びます。その点と点を繋いでいくのがガイドです。地域の歴史は、縄文時代から江戸時代、近代が積み重なって出来ています。時代で区切られているものに縦串を刺していくのが地域の皆さ

んの生活感ですから、歴史や産業、生業、いろいろなものを結び付ける形でガイドを養成していくと、新しい大館型の歴まちガイドが出来ていくのではないかと期待しています。

田中: 中村さんいかがですか。

中村: 平成18年に矢立峠のガイドマニュアルを作りました。新聞で紹介されたり、仲間に知らせたりしていけば、市民も理解してくれて裾野が広がるのではないかと考えたのですが、それだけではだめでした。

もっと知ってもらうことが必要だと思い、今年、市の事業を活用してガイドマップを作成しました。大館市は、ふるさとを知りふるさを支える気概を持つ人材の育成を柱に据えた「ふるさとキャリア教育」を行っています。未来を支える小中学生にふるさとの素晴らしさを一層、勉強してもらいたくて、教育長に、「小中学校、公民館に置いて下さい」とマップを託しました。地道な活動を続けていけば、私たちの後継者が出てくると思っています。

まとめ

田中: これまでの議論が結論というよりも、これからの人たちが仕組みを作る参考にしていただくことが、この分科会の目的だと思います。

これからは地域の資源を最大限に活用していかなければならない時代です。エドウィン・ライシャワーが「山の向こうのもう一つの日本」(東北を見て、山の向こうにもう一つの日本がある)という言い方をしていますが、インバウンド(訪日外国人旅行)で、これまで東京と大阪のベルト地帯だけを歩き、買い物をしてきた外国人に、「本当の日本を知りたい」という動きが出てきている。今まで彼らが訪れたことがない、東北の魅力は、最大の資源になります。まち歩きや街道歩き、自転車で巡ることもあります。

そう考えていくと、「景観十年、風景百年、風土千年」という言葉がありますが、ジオパークにしても歴史まちづくりにしても、我々が教科書で習った時代を輪切りにした伝え方ではなく、自然の中でどういう風土ができて、どういう営みがあったのか。単に地域の歴史を語り、伝えるのではなく、背中に背負って前を見たら地域の何が見えるのか、それをガイドが伝えることが必要だと思います。

棟方志功の『新日本百景』の一節を紹介します。「風景は人が発見するもの。人が発見しなければ風景は存在しないという意味では、人が創作するものだと言っているかもしれない。山や川がそこにあれば、そこに風景があるかのように考えては間違いだろう。そこに

一つの美しい眺めとして発見しない限り、その山もその川もただ地球の表面の凸凹の一種に過ぎない」。これが志功の言葉です。

自然がある、川がある、史跡があると言うだけでは、実は不十分で、その美しいもの、大切なものがあると認知しない限り価値は生まれないと述べているのだと思います。

これを伝える手助けをするのがガイドの役割ではないか。むしろ、歴史的事実を教えるのではなく、まちを、歴史を、自然を理解していただく助けをするのがガイドの役割ではないか。そこにあることだけではなく、考え方、解釈を含めて伝えていかなければ意味がない。

そういうガイドの後継者をつくり、さらに質を高めていくためには、まちに対する愛着＝心、活動資金ができる仕組み、知恵＝技が必要でしょうし、継続していくガイドシステム＝体も必要だということではないかと思えます。

繰り返しになりますが、歴史を背負って前を見たら何が見えるのか。それが今にどうつながって我々の生活があり、まちがあるということを考えなくてはならない。そして、これから未来にどう伝えていこうか、どうしていこうか、という未来的な思考も必要です。遺産や遺跡を語り、教え込むのはガイドの役割ではないと思えます。

そうするとボランティアガイドの限界が見えてきます。お金をもらって質を上げ安定していくことを考えていく必要がありますので、皆さんでしっかり議論されて、仕組み作りをしていただきたいと思います。

この国をめぐって海外から人がやってきます。本当の日本を伝えて行くというためには東北というのは大事な地域ですので、よろしくお願ひしたいと思えます。

※図は、プレゼンテーション・スライド等から抜粋



中村 弘美氏

プレゼンテーション資料

1. 「矢立自然友の会」の活動紹介



天然秋田杉 & 歴史の道 (伊能忠敬 (吉田松陰) (イザベラ・バード))

会員の活動 (矢立峠散策会開催、遊歩道整備、標柱・案内板整備)

次代へ継承する歴史の道・羽州街道 (矢立遊歩道、古羽州街道、明治街道、旧国道のネットワーク)

とうほく街道会議 第13回交流会 大館大会 第2分科会 矢立自然友の会 会長 中村 弘美 平成29年10月13日

2. 「矢立自然友の会」の設立と主な活動



- 平成2年に会員約30名で「矢立自然友の会」を充足し、同時に会長へ就任
- 春は「新緑の散策会」、秋は「紅葉の散策会」を毎年開催
- 散策路の刈り払いや、排水路整備を会員と共に定期的実施
- 案内看板や記念標柱の整備を実施

3. 山口県 萩市との交流



平成14年萩市一行来訪記事

4. ガイドの誇りになるつながる来訪者との絆



森林ボランティア活動登録証



萩市の野村市長からのお礼の手紙

5. ガイドマニュアルの作成



6. 案内人の大切さと多様な参加者への説明



2006年6月 広報おおだて

2008年6月 広報おおだて

7. 平川市との連携



平川市観光関係者との交流記事



平川市側の散策路整備記事

8. 遠方からの来訪



羽州街道交流会の記事

県境を越えた交流記事

9. 「矢立自然の会」のガイドの状況

多様な人材が望ましい。⇒実情は地域のボランティアに頼らざるを得ない状況

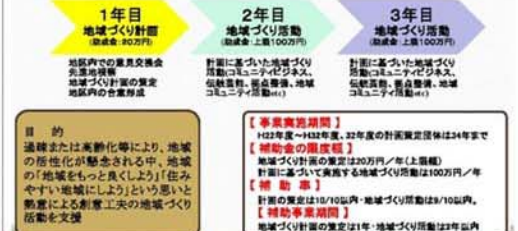


身振り手振り案内する山内さん

10. 民間の応援制度「大館愛購運動」の紹介



11. 大館市地域づくり協働推進支援事業【地域応援プラン】



12. 石碑や標柱などの新設



矢立杉の由来を記す石碑建立の記事

わかりやすい石碑と標柱

13. 吉田松陰の漢詩板



吉田松陰の字体を模写した漢詩板

大勢の皆さんのお名前を示す建立者名板

14. 支援の輪の広がり



矢立郷土史会建立の標柱

案内板新調の記事

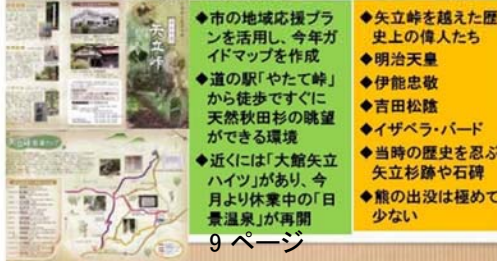
15. 地域づくりへの貢献



松下村塾の塾生案内記事

- ◆吉田松陰ゆかりの土地へ、大館松下村塾の塾生が訪問
- ◆大館商工会議所中田会頭はじめ、地元企業有志のメンバー
- ◆散策して初めてわかる歴史の道
- ◆当時の面影がそのまま残る街道

16. 「矢立自然友の会」作成ガイドマップのご紹介



- ◆市の地域応援プランを活用し、今年ガイドマップを作成
- ◆道の駅「やたて峠」から徒歩ですぐに天然秋田杉の眺望ができる環境
- ◆近くには「大館矢立ハイム」があり、今月より休業中の「日景温泉」が再開
- ◆矢立峠を越えた歴史上の偉人たち
- ◆明治天皇
- ◆伊能忠敬
- ◆吉田松陰
- ◆イザベラ・バード
- ◆当時の歴史を忍ぶ矢立杉跡や石碑
- ◆龍の出没は極めて少ない





澤木 博之 氏

プレゼンテーション資料



ジオツアーモデルコース

日本から海外へ行くならここへ。観光客が増えることで山内観光はますます盛んになる。山内観光は、山内観光会館、山内観光バス、山内観光タクシーなど、山内観光で楽しむことができます。

- 山内観光会館
- 山内観光バス
- 山内観光タクシー

ジオの旅マップ

奥羽平野・大潟 一気両立するジオ探訪のついでに...

① 八幡崎ジオパーク学習センター

② 大潟村平野博物館

③ 八幡崎字研ジオサイト

④ 大潟村平野博物館

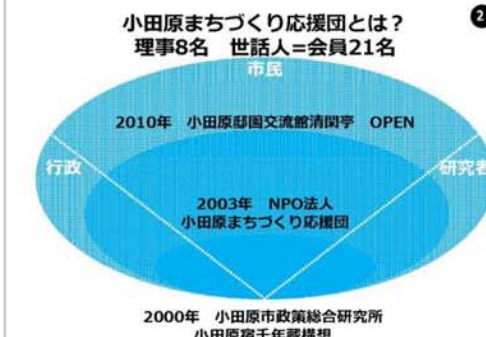
⑤ 八幡崎ジオサイト

平井 太郎 氏

プレゼンテーション資料

共感のまちあるき

2017.10.11 聖母学院 小田原まちづくり推進部 弘前大学 社



地域資源が「ありすぎる」

東京から最短の 天守閣+桜 年間500万人

日本最大の観光地 箱根・熱海 年間5000万人

海の幸 山の幸 里の幸

いずれも最上位価格

歩いてみて見えた共通のコンセプト

行き交う人のために 日持ちがするように 手を加えている!?

海の幸 山の幸 里の幸





[写真] 左:国境・矢立杉跡 右:大館八幡神社